

## タスクを用いたスピーキングの指導と評価

CELES2017 英語教育実践セミナー1

2017 年 6 月 24 日 @信州大学

### 概要

### 目的

- ・ Task-based Language Teaching (TBLT)の考え方にもとづき,
  - － タスクを用いてスピーキングの指導と評価を行うことの意義を紹介すること
    - ・ ※今回はスピーキング以外（特に受容技能）のタスク評価の話は時間の都合でできませんごめんなさい
  - － 教室内でタスクを用いた指導と評価を行うための具体的な方法を提案すること
  - － タスクを用いた評価を実際に体験してもらうことで、フロアの皆様と一緒に
    - ・ タスクを用いた指導の可能性について議論すること
    - ・ タスクを用いた評価の限界や注意点について考えること

### 目次

- ・ TBLT とは
- ・ タスクを用いたスピーキング指導
- ・ Task-based Assessment (TBA)
- ・ タスク・ベースのスピーキング評価
- ・ タスク・ベースのスピーキング評価の具体例
- ・ タスク・ベースのスピーキング評価の限界や注意点

### About me

- ・ 田村 祐（たむらゆう）
- ・ 名古屋大学大学院国際開発研究科 博士後期課程在籍
- ・ 愛知工科大学で非常勤講師もやっております
- ・ 研究の興味・関心
  - － 第二言語の文法習得・文処理
  - － タスクを用いた言語指導
- ・ Email
  - － [yutamura@nagoya-u.jp](mailto:yutamura@nagoya-u.jp)
- ・ Website
  - － <http://www.tamurayu.wordpress.com>

※スピーキング研究の専門家というわけではありません

### お願い

たまに「フロアの皆さんに考えてもらう、または体験してもらう」時間を取りたいと思います

※私自身ワークショップ形式は苦手なので心苦しく思っております。お許し下さい。

## タスク・ベースの言語指導とは

- ・ 言語教育のプログラムのすべてをタスクを単位として構成する言語指導

## タスクってなんだろう

- ・ タスクがタスクであるための条件(松村他, 2017)
  - － 基本的な焦点が意味にあること
  - － 学習者がリソースを自分で選択できること
  - － なんらかのギャップがあること
  - － タスクの達成についての評価がなされること

## なんでタスク・ベースなんだろう

- ・ 第二言語学習のメカニズムとの整合性
  - － 学習者には内的なシラバスがある
  - － 言語の発達は個別の言語項目の単なる集合体ではない
- ・ 学習者に合わせた柔軟なカリキュラムの提供が可能
  - － TBLT は「メソッド」ではなくフレームワーク
  - － ある枠組みからこぼれ落ちた学習者を限りなく救おうとする
- ・ 「何を覚えたか」ではなく、「どんなことができるようになったか」を重視
  - － 学習をどの段階で終えても、そのとき、そのレベルで何かができるような学習者を育成できる
- ・ 詳しくは、「タスク本」をお読みください（大修館さんのブースへ GO！）
- ・ あるいは Amazon で今すぐ予約！ ----->



## タスクを用いたスピーキング指導

### どんなスピーキングのタスクがあるだろう

- ・ 発話が求められる言語使用場面ならどんなものでもタスクになる
- ・ 現実には...
  - － 身につけさせたいスピーキングのちからを考える事が最優先
  - － つまりは、指導の目標を明確に立てる
- ・ 例えば、今教えている児童・生徒・学生が...
  - － 1 学期（前期）の終わりまでに「〇〇ができるようになってほしい」
  - － 中学卒業時には「〇〇ができるようにしてから送り出したい」

### それでは考えてみましょう

- ・ 今現在教えている児童・生徒・学生が今年度末までにスピーキングでできるようになってほしいことを考えて書いてみましょう（3 分間）
- ・ 今現在指導している立場にはない方は、「自分が英語指導者になったと想定して」、児童・生徒・学生にできるようになってほしいことを考えて書いてみましょう

私ができるようになってほしいと思っていること

- ・ 書き終わったら、隣近所でシェアしてみましょう（3 分間）

隣近所の方たちができるようになってほしいと思っていること

### どうやって教室指導に生かせるだろう

- ・ 先程考えた「できるようになってほしいこと」を思い浮かべてください
  - － その「できるようになってほしいこと」を学習者ができるようになるためにはどんな指導が必要でしょう？
  - － 学習者ができるようになったのかどうか確かめる、評価するためにはどのような方法を用いたらよいでしょうか？

必要な指導は？どのような評価方法で評価する？

### タスク・ベースの考え方

「                    」を具体的なタスクの形に落とし込み、「                    」を作成する

### Task-based Assessment (TBA)

#### TBLT での評価はどうなってるんだろう

- ・ 基本的には目標準拠評価（いわゆる絶対評価）
- ・ スピーキングやライティングであれば文法的な正確さや流暢さなども評価はできるが、（                    ）な評価が基本
- ・ Pass or Fail の二値評価が理想, but...
- ・ 文法的な誤りは全部無視するってこと？「出川イングリッシュ」でいいの？  
-> It depends

#### TBLT における言語的側面の評価

- ・ 「文法を評価に入れるかは評価の目的による（Long, 2015）
- ・ 懸念事項
  - － 文法的な誤りの度合いや頻度の基準はどう決める？
  - － タスクは達成したけど文法的誤りを犯した学習者はどう評価される？
  - － 授業に占める文法の割合が高まってしまう-> TBLT ではなくなってしまう
- ・ （後出しなら）タスクの達成に必要な文法の指導は OK
- ・ 「タスク研究」としては統語的・語彙的複雑さ、正確さ、流暢さなどが扱われているが、色々問題が多すぎる（Fukuta, Nishimura, & Tamura, in prep）うえに実践的な実用性は乏しい

## 文法の扱いに関する立場の違い

- ・ Michael Long
  - － 言語的な側面に対する指導はあくまで教育的指導として
    - ・ インプットを与えること
    - ・ Focus on Form を取り入れること
    - ・ 否定的フィードバックを与えること、などに限る
- ・ Rod Ellis (2003), 名城大の松村さん, and me
  - － モジュラーアプローチなども許容
    - ・ 文法的なことを中心に扱うシラバスと TBLT を（ ）運用
    - ・ プログラムの目的や学習者に合わせて割合を調整
      - － TBLT 多め+文法少なめ
      - － 文法多め+TBLT 少なめ, など

## どんなときでも大事なこと

- ・ 何のために評価するのか
  - － 形成的評価 (formative assessment) ? 総括的評価 (summative assessment) ? 診断的評価 (diagnostic assessment) ?
- ・ 言語的な評価は「目標」や「目的」なのか?
  - － 何のために「いい」発音を身に付けさせる?
  - － 何のために「正しい」文法を身に付けさせる?
  - － 何のために「流暢な」言語産出を求める?

## TBA の課題

- ・ 1つのタスクができるかどうかを見れば別の似たようなタスクもできるといえるか?
- ・ そのときに, どのようにして「似たようなタスクである」と判断できるか
- ・ ただし...
  - － この課題はあらゆる文脈における教育測定も抱える問題
  - － 例: あるリーディングの問題に正答した学習者は別のテキストの同じような問題に正答できる? (どうやって「同じような問題」と判断する?) (Long, 2015)
- ・ 現実世界で起こりうるタスクを模したタスクを教室内で実施するような場合を除き, あるタスクを達成できたかどうかを判断することは簡単ではない
- ・ じゃあやっぱりタスクの評価はムリ? -> No

## 総合的評価と分析的評価

- ・ 総合的評価
  - － スピーキングパフォーマンスを総合的に数段階で評価して 1つの数値で表すこと
  - － EBB (Empirically derive, Binary-choice, Boundary-definition) 尺度 (e.g., Hirai & Koizumi, 2013), etc.
  - － TBLT の評価はどちらかといえばこちらに近い
- ・ 分析的評価
  - － パフォーマンスをいくつかの観点に分けてそれぞれを数値で表すこと
  - － 文法, 語彙, 流暢さ, 談話, etc.
  - － 診断的評価が目的の場合に有益

## タスク・ベースのスピーキング評価

### タスクの出来をどのように評価したらいいだろう

- ・ みなさんは、この発話をどのように評価しますか？
- ・ 課題：次の絵の女性を見てください。絵を見ていない人にも状況が伝わるよう英語で説明してください（制限時間 30 秒）

この発話の出来は？（自由に書いてみてください）

### タスク・ベースのスピーキング評価規準の作成

- ・ 「 」を重視
- ・ 具体的で明確な評価の基準を作っておく
  - － 例えば、先ほどの絵描写タスクなら、以下の2点を伝えられているかどうか
    - ・ エレベーターが混雑している（満員である）こと
    - ・ 女性がエレベーターに乗れないこと
  - － この2つが伝えられていれば、「タスクが達成できた」と判断する - これがとりあえず全員がクリアすべき目標
- ・ 文法的正確さや流暢さなどは、それがタスク達成に必要である場合に評価の規準に含める

### 先ほどの発話をもう一度聞いてみましょう

この学習者は、「タスクが達成できた」といえるでしょうか？（どちらかに○してください）

いえる・いえない

理由

### 評価例

- ・
- ・
- ・

-> 「タスク 」

### 常に二値評価しかないのか

- ・ 場合によっては数段階の尺度を用いてもよい
  - － 例：間違い探しで見つけられた間違いの数
- ・ ただし、階級数が多すぎるのは問題
  - － 7 段階のうちで4がつく学習者はそのタスクができたの？できなかったの？
  - － 観点別評価との兼ね合いからも3段階評価が現実的？

## 観点別評価との兼ね合い

- ・ 「できた」・「できなかった」の二値判断でどう ABC 評価に？
  - 案 1
    - ・ A：タスクが達成できた
    - ・ B：タスクが一部達成できた
    - ・ C：タスクが達成できなかった
  - 案 2
    - ・ A：余裕をもってタスクが達成できた
    - ・ B：タスクがなんとか達成できた
    - ・ C：タスクが達成できなかった

## 教室場面でのタスク評価

- ・ オブザーバー役の活用
  - 生徒同士で評価をさせる
- ・ タスクの達成が「残る」ようなワークシートの工夫
  - コミュニケーションの結果として情報のギャップが埋まったことが確認できる
  - 話し合いの結果として合意に至ったことが確認できる
- ・ 発話を録音して生徒に書き起こしをさせる（毎回ではなくとも）
  - 発話の一部だけでも OK
  - 書き起こしさせることで、教師の目の届かないやりとりも評価の対象にできる

## タスク・ベースのスピーキング評価の注意点

### 注意点

- ・ 目標（タスク）なしに評価はできない
- ・ 行動として観察可能な評価規準をつくる
- ・ 1 度っきりの評価にしない（同じようなタスクを繰り返す機会を保障）
  - 内容によってパフォーマンスはばらつく
  - 1 回の授業の結果でタスクの達成を期待しない

## タスク評価の（研究者としての私の）課題

- ・ 「できた」か「できなかったか」を教師が主観的に評価することの信頼性は？
- ・ 生徒同士に評価させたときの信頼性は？
- ・ 「スピーキング能力」の評価を主たる関心としてきたこれまでのスピーキング研究とどう接続していくのか
  - 日本でいえば順天堂大の小泉先生の一連の研究など（Koizumi & Kurizaki, 2002; Koizumi, In'nami, & Fukazawa, 2016）
  - 10 年以上前から"task achievement"といった用語は使われている（e.g., Koizumi, 2005）

## おわりに

### まとめ

- ・ 『タスク・ベースの英語指導—TBLT の理解と実践』（大修館書店）をお読みください->
- ・ 「[タスク・ベースの英語指導—TBLT の理解と実践](#)」から出発して到達規準タスクを作成



- ・ 中長期的な視野を持って指導と評価を（単元というのはいくくり）
- ・ 評価規準は、あくまで「タスクが達成されたか」
- ・ 言語的な側面の指導と評価は、「 」という意識で

ご意見・ご感想などをお待ちしております（懇親会にも出席予定です）

#### 連絡先

田村祐（名古屋大学大学院）

Email: [yutamura@nagoya-u.jp](mailto:yutamura@nagoya-u.jp)

#### 参考資料

Ellis, R. (2003). *Task-based language learning and teaching*. Oxford University Press.

Fukuta, J., Nishimura, Y., & Tamura, Y. (in prep). Pitfalls of CAF analysis in investigating dynamic systems of performance and cognitive process during task engagement.

Long, M. H. (2015). *Second language acquisition and task-based language teaching*. Wiley-Blackwell.

松村昌紀編（2017）『タスク・ベースの言語指導—TBLT の理解と実践』大修館書店：東京

Koizumi, R., In'nami, Y., & Fukazawa, M. (2016). Multifaceted Rasch analysis of paired oral tasks for Japanese learners of English. In Q. Zhang (Ed.), *Pacific Rim Objective Measurement Symposium (PROMS) 2015 Conference Proceedings*. Singapore: Springer Singapore. doi:10.1007/978-981-10-1687-5

Hirai, A., & Koizumi, R. (2013). Validation of empirically derived rating scales for a story retelling speaking test. *Language Assessment Quarterly*, 10, 398–422. doi:10.1080/15434303.2013.824973

Koizumi, R. (2005). Attainment levels of speaking ability of Japanese junior high school students. *JLTA Journal*, 8, 31–50.

Koizumi, R., & Kurizaki, I. (2002). Developing rating scales for monologues from Japanese junior high school students. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 13, 51–60. doi:10.20581/arele.13.0\_51